

書籍紹介『オオカミがいなくて、なぜウサギが減るのか』

(山田 健 著、2015年6月、集英社、189頁、本体価格1300円+税)



谷口 萌、浅川 満彦 (酪農学園大学獣医学群)

自然環境崩壊の有様を様々な実例をあげながら示されていく(本書口絵にも著者オリジナルの図が2種類あり素晴らしい)。そこからどうすればこの現状を変えて「持続可能」な社会をつくっていくことができるのかを水、土壌、植物、動物、人の多角的な面からウィットに富んだ語り口で前向きに論じられている。

サントリーホールディングス株式会社にて研究者として「天然水の森」プロジェクトなどに携わる筆者は、基盤となるピラミッドの底辺、つまり土壌が崩れてしまうとピラミッド全体が崩れてしまうと繰り返し警鐘を鳴らす。生態ピラミッドを守ることは私たちの生活を守ることに繋がるのだが、現代人はその直接性や現状の緊急性になかなか気づくことができない。例えばある動物が絶滅する、シカ害で山が荒れている、どこかの島が海面上昇によって沈んでいく。これらの問題は都市部に住む者にとっては一見関係ない事柄に思ってしまう。深刻な状況に目を向けることなく、目先の利益を求めてもっと幸せになりたい、お金が欲しい、と欲がでるのが人間だ。化学肥料や農薬を多用し、もう後戻りできないようなところまで自然に甘え搾取し続けてきたことで、土壌の崩壊はすでに再生不可能ではないかともいわれている。豊かな経済成長をうみだした一方、今や麻薬のように私たちが依存してしまっている「進歩信仰」を捨て、「持続可能」な文化に回帰すべき時だと筆者は言う。

ただ「持続可能」な文化に変えていくために、自然環境に対して人間が過度に介入することは必ずしも良いことではない。人間が自然をコントロールしようとするとき、自然は時に私たちの予想もつかないほど強く抵抗するが、時に脆い。この

もし、保護管理(マネージメント)にいささかでも関心を持っていれば(特に、本誌Field Noteの熱心な読者ならば)、題名から本書内容がオオカミ不在により国内のニホンジカ(あるいはエゾシカ)個体数が、環境収容力を大幅に超え、これを支えきれなくなりつつある自然生態系の質が急激に劣化、最終的には、同じ植物食性の哺乳類であるノウサギ(あるいはユキウサギ)の生息環境すら悪影響を与えるような事態になるという事例集を想像していた。それならば、保護管理分野に志向性を示す新人ゼミ教育の課題図書として預け、書籍紹介の小文を作成させることにした。ここでは、まず、課題とされた谷口によるレポート(感想)全文を、次いで、浅川のコメントをそれぞれ掲載し、書籍紹介とした。(文責 浅川)

生き物の世界はピラミッド型の生態系で成り立っていてこれを「生態ピラミッド」という。ピラミッドの最下層は土壌、次に植物、そして植物を食べる動物、その動物を食べる肉食動物となっていて、頂点に向かう程、種数が少なくなるため、その概形がピラミッド型を示すというものだ。本書ではこの生態ピラミッドの概念を土台にして、

兼ね合いは非常に難しいが、今後人間は自然がもつ力や流れや性質にうまく巻き込まれていかなければいけない。

さて、「オオカミがいなくて、なぜウサギが減びるのか。」という問いかけがこの本のタイトルなのだが、捕食者のオオカミがいなくなれば、ウサギは減びるところか大量に増えるように思える。しかし、筆者は「オオカミがいなくて、ウサギが減びる」理由を私たち読者が理解できるか大胆に問うている。読了後、この問いに誰もが答えることができるようになっていようだろう。(文責 谷口)

前段・谷口は「水、土壌、植物、動物、人の多角的な面から(中略)論じられている」と紹介したが、これらは並列ではなく、明らかに軸足は土壌にあった(他は、動物も含め派生)。いや、むしろ、この本は本格的な土壌学を学ぶ前の入門・啓発の書として推奨すべき作品である。おそらく、優れた実践者である著者は、このような読まれ方よりは、農業を選択肢の一つとして模索する若者や過疎地域の産業振興に苦悩する政策関係者あたりに読んで欲しいのであろう。が、評者(浅川)が獣医学部課程で必須科目の一つとして学んだ(いや、学ばされた)関連科目群に土壌学があり、これがなんとも悲惨であったので、いや、授業ではなく、当時、学生であった評者が未熟であったのであろうが、いずれにしても、入門書云々の評価には、それなりの理由があったのである。

著者が指摘する土壌の現状は、あまりにも危機的であるがゆえ、国際連合は、つい最近の2015年を「国際土壌年」として、世界各地でイベントや出版が続いた(浅川, 2018)。しかし、ほとんど話題には上らなかった。評者が勤務する農業系大学ですら授業でもほとんど取り上げていなかったようなので、当然、谷口も知らなかった(と、いうか、現行の獣医学課程に「土壌学」という科目が無くなっている・・・)。翻って、日本では土壌劣化が間接的要因で多数の人命が失われている災害が続いても、直接的契機となる温暖化による気候変動

やスギヒノキ植林の限界などに目を奪われ、その根本原因である土壌には無関心。あたかも、獣医学ど真ん中のことを早く学びたい軽薄な学生が、土壌学を蔑にしたように。もともと、関心を持たないというのは、生命を脅かすほどのイベントが、この国では、いまのところ無いということの証左で、つかの間の幸福を享受しているのである。これが一変、深刻な食糧(料)不足になり、その原因の大部分が劣化した田畑の土壌となれば、国民はまったく別の態度を取るのだろうが、おそらく、その時は、既に時遅しとなっているはずだ。まあ、このようなテーマを扱う類書ならば、情報量は増えても、このように読者を十分に不安にさせて終りとなろう。

だが、本書はこの国で、取り敢えず実行可能な(あるいは、その気にさせる)最悪シナリオ回避のための実践例や新たな生業を生み出すアイデアが多々示されていた。その中心に著者の大手飲料製造会社の強かな「経営戦略」が見え隠れしないでもない。だが、数多の酒なりノンアルコール飲料を選択する際、本書を思い出すことになれば、評者が当該社製の酒を選ぶボタンを押すことを躊躇しない(そして、「僕は自然を守るために飲むんだからね」位のことは言いそうだ)。生態系保全に関し、公的資金に期待できない現状では、民間の潤沢な資金力と柔軟な企画力・決定力が不可欠である。また、大学教員で就職関係の委員を長年務めている立場からすれば、経営的に安定しているにも関わらず、自然志向を示す企業姿勢に、有能な人材が結集していくことにもなろう。息の長いレベルの戦略ではなく、小手先の戦術ごときでは、もはや乗り切れなくなっているのは、企業延命も生態系保全もまったく同じ、という読み方はへそ曲りであろうか。(文責 浅川)

文献

浅川満彦. 2018. 書評『世界の土・日本の土は今地球環境・異常気象・食料問題を土からみると』. 畜産の研究, 72 (1): 82.